

周再賜

(香里中学・高等学校教諭)

萩原俊彦

差別と迫害に抗した教育者

一

かつて、住谷悦治は、同志社で育った三人の偉大な教育者として、清水安三・岩井文男・周再賜を私に紹介したことがある。清水は崇貞学園を北京につくり、戦後・日本に引き上げてからは、文書伝道を展開しながら町田市に桜美林学園を創設、たちまち、総合学園に発展させた。企画力とおおぼらは、天才的なものであった。しかも、高校の野球部は全国優勝をし、野球を介して、キリスト教を伝道する清水の姿は、この世を去る少し前ま

で継続した。奇しくも、彼と周は神学部同級生であった。岩井文男は彼らより若く、政治学や神学を学んだ後、実業界入り、その後、牧師生活や神学部教授を歴任して、安中の新島学園長に就任、地方私学に短大を設立、初代学長として、天に召された。新島学園は湯浅家が資産を投じ、共愛に対する男子校として生まれたが、今では共学の中・高と女子短大を持つに至った。

新島学園は戦後地方私学の雄である。此処までに学園を発展させた岩井の教育指導力は類い希なものである。な

お、岩井は一時共愛の理事を勤めたことがある。清水・岩井の両名は住谷悦治と大変親しい間柄であった。それに対し、周再賜は東大卒の新進教授住谷とどの程度の面識があったか否か、聞くことはなかった。ただし、共愛女校は群馬県で、最古の女子教育機関であり、住谷の姉が同校の卒業生であり、伯父の住谷天来も此処で教鞭をとったことがある。満州から群馬の実家へ引き上げて来た、住谷申一は周を訪ね、同校の教員になろうとしたこともあった。

ゆえに、住谷も周と共愛に無関心では

周再賜略歴しゅうざいし

- 一八八八(明治二一)年台湾屏東市に生まれる
- 一九〇四(明治三七)年国語学校卒業
- 一九〇五(明治三八)年同志社普通学校二年編入学
- 一九一〇(明治四三)年同志社大学神学部入学
- 一九一五(大正四)年同学部卒業
- オペリン大学神学部二年編入学
- 一九一七(大正六)年同学部卒業
- シカゴ大学神学部入学
- 一九一八(大正七)年同学部卒業
- ユニオン神学部入学
- 一九一九(大正八)年同校卒業
- 一九二一(大正一〇)年帰国、同志社大学神学科助教授、この年勝見千代(有賀鉄太郎夫人の姉)と結婚
- 一九二五(大正一四)年同志社辞職
- 前橋共愛女学校長に就任
- 一九六五(昭和四〇)年退職
- 一九六九(昭和四四)年死去

なかつたであろう。しかも、住谷の故郷に近い前橋で、台湾生れのハンディを持つ周がどの様に、女子教育を進めて行つたか、関心をもっていたであろう。残念ながら、詳細を聞く前に、住谷はこの世を去つた。しかし、同志社の三大教育者として周を評価した住谷は慧眼の持主であつたといえよう。一体、教育者周の魅力とは何であろうか。そして、我々は周の業績から何を学ぶべきであろうか。可能な限り論じてみたい。

二

周再賜は一八八八年、台湾の屏東市でプレスビテリアンの伝道師の子供として生まれた。この地には一八六五年に長老教会が伝道を始め、全人口の四パーセントをキリスト者が占める状況を作り、更には、一般文化がキリスト教と結び付いて発達してきた。欧米の宣教師と交流を持つて成長してきたこの地の伝道師は、当然のことながら、世界情勢を的確に把握したり、子供の教育にも深い関心を燃やす人がでてきた。周再賜の両親もそのよき一例であつた。三男四女にそれぞれ

教育を受けさせ、教養あるキリスト者に育て上げた。但し、父親はプレスビテリアンであつたから、信仰的には究めて保守的で堅い信仰生活を継続していたはずである。しかし、周の信仰は全く異なるリベラルなものに成長していった。それについては、あとで述べたい。

さて、周が物心のついた日清戦争後、台湾は日本の植民地となり、この地の支配は日本軍にゆだねられた。当然の事ながら、台湾のキリスト者は幾多の迫害を被ることになった。台湾各地の教会が焼かれ、キリスト者が多数虐殺されるなどの事件が多発した。そんななかで、周は少年時代を過ごしたのである。従つて、彼が学んだ国語学校は台湾の現地人と日本人を別クラスにするなどの差別教育が公然と行われた。無論、日本人教師の中には、規律正しい生活習慣を指導する優れた教師もおり、中には周の才能を見て英語の特別指導をする人もいた。そのため、彼の才能はめきめき発達し、卒業席次二番で同校を出ることになった。しかし、植民地差別は厳しく、就職のめどはたたなかつた。やむを得ず、三年間、二

畳の部屋に下宿して専売局で働き、将来を掛けることになった。

やがて、一九〇五年四月、兄の励ましを受けて、周は日本に渡り、キリスト教主義学校で学ぶことになった。その際、彼は、明治学院と同志社のどちらを選ぶか悩んだそうである。前者も進学の候補になったのは、父親がプレスビテリアンの伝道師であったためであろう。しかし、兄の作つたくじを引いた結果、同志社進学を決意、勇躍、京都にまいり、中瀬古六郎の面接諮問を受け、普通学校二年に編入学を許可され、寮生活をはじめることになった。彼は卒業後、医学校にすむつもりであった。しかし、次第に此処での生活は彼の進路を変更することになる。当時の寮は自治寮であり、武田猪平・古木慶吉が総寮長であった。地方出身の学生の中には、乱暴者もいたが、宗教活動は盛んであった。その環境の中で、周は有志と共に夕陽会を組織、毎夕、礼拝をすることにした。聖書の輪読会も組織され、早天祈禱会も活発になった。しかし、自治寮の生活とは言え、周は生活習慣の違い、民族の相異に悩むこともあつ

た。日本人の優越感には大変苦しめられた。ある時は、差別意識も濃厚な「ちゃんころ発言」で侮辱されたこともあつた。新島襄の祈りによって開校をみた同志社にも、帝国主義国日本の排外主義思想は波及してきたのである。幸いそれを諷めてくれたのは、波多野培根であつた。以来、あまり、民族差別を受けることはなくなつた。それと共に、周は教育者波多野に感化され、その影響は多分に共愛教育と彼の人生観に深い影響を与えることになる。規則には厳格だが、何処までも、肉親のごとく生徒を大事に扱つた周の教育者像の基礎は此処に築かれたのである。さて彼が大変な勉強家であつたこと、それは寮生時代から神学部時代にかけて、大塚節治・片桐哲・山田貞夫・清水安三などの親友と出会い、切磋琢磨しえたからであろう。間もなく、彼は同志社に立ち寄つた宣教師夫妻に触発され、牧師を志願、無事、神学部を卒業する。彼は京都で学んだ最初の台湾出身者であり、以来郷党の為に、窓を開くことになつた。しかし、周の人生は多難であつた。伝道者としての赴任地が保証されないの

である。彼は大阪の組合教会本部へ出向いて相談しても、風俗・習慣などの相異を理由に、いずれの教会へも推薦されなかつた。そのため周は一つの進路を選択することになる。それがアメリカ留学であつた。

三

一九一五年夏、周再賜は渡米、バンクーバーの日本人教会牧師速水藤助の世話に暫くなり、オペリン大学へ進学した。既にそこには、小崎道雄・柏木隼雄など男女の日本大学生が在学していた。此処で周はハードなアルバイトを重ねながら勉強に勤しみ、BDの学位を取得、次いでシカゴ大学に進学、同時にコングレゲーショナルチャーチ神学校で学ぶことになった。此処で、一年の研究生活をし、「宗教心理学における潜在意識」でMAを取得、直ちに、ニューヨークのユニオン神学校に進み、アメリカ最高峰とも申すべき神学者、ライマン（元、オペリン教授）を始めとする教授たちの指導を受けることになつた。その折、山田貞夫と共に労生活をすすめている。なお、ライマン



周再賜氏

は農村伝道に詳しく、平和主義者としても知られ、柏木隼雄は多分に彼の感化を受け、父親の義円にもその旨を詳しく伝えていた。かくして、学問と信仰を深めた周は帰国するが、既にニューヨークで

出会った片桐哲が同志社への就職を推薦、さらに、平和会議出席の海老名弾正とも同地で会見、母校への就職を決意して、一九二二年に帰国、同志社大学助教に就任した。以来四年間、母校に奉仕

することになる。この間、女専や中学でも授業をもつことになった。その頃、周は長老教会の出身であるにも拘わらず、リベラルの信仰と神学をもっていた。それは、自由神学盛んな同志社で育ったことや、オペリンのキング、シカゴのスマス教授らの学風が大きく影響したのである。この一年後にラーネットの司式で、民族の厚い壁を破って勝見千代と結婚、素晴らしい同志社ファミリーを築くかに見えた。念願の按手礼も在職中に受け、牧師としても働くめどがたつた。しかし、同志社でも周に対する不愉快な事件が発生した。女専を皇后が行啓、授業参観の折、周の担当する修身を他の教師がその日に限り代行したのである。彼にとつては極めて不快な出来事ではなかったろうか。台湾人差別でないとの理由を立証する史料が出て来て欲しいと願うのは私だけではあるまい。さらに、周は、海老名総長と大学運営にあたり激突する事件が発生した。周は小集団主義の教育を重視する人であったが、海老名は多数教育に踏み切っていた。其のため周は批判活動を展開し、ビラをキャンパスで配布す

るなどの行動を実行した。終に、一九二五年春、同志社大学を辞職、その年の秋、

在米以来の親友柏木隼雄や小崎通雄の薦めにより群馬県前橋市の共愛女学校校長に就任する。以来、彼は天に召される寸前まで、同校の教育に献身するのであった。同志社は全く惜しい人材を失うことになった。普通学校時代の周は朝鮮・その他、植民地出身者と共に、和田琳熊(洋一の父)に大事にされ、和田はしばしば、彼らを自宅に招いて歓待し、将来に期待をかけていた。洋一も周らを兄のように慕っておったようであり、現在でも和田のご遺宅には、普通学校時代を含めて周らの写真が残っている。また高橋虔は神学部で大変世話になった学者は周再賜であると晩年まで強調していたし、田畑忍は実に謙虚でオーソドックスな信仰と教育観の持主であったと周の人柄を懐かしんでいた。しかし、周は天国への通路として、人生のごく一時期、京都へたちよったにすぎないと語り、以来二度と上洛することはなかった。しかも、南湖院で療養中の妻千代には無断で、前橋赴任を実行したのであった。すべてが、み神の

召すままに、これが周の行動規範であった。

四

共愛女学校は一八八八年二月二九日創立(開校記念日は三月一日)の群馬県最古の女子教育機関であり、その前史はさらに古く一八八四年に遡上る。熊本バンドの加藤勇次郎が前橋にきて英学校を創設、その事業を竹越与三郎が継承して男女の青年に近代的な学問を伝授していた。惜しくも同校は廃校となるが、その施設を引き継いで開校したのが前橋英和女学校、即ち共愛女学校であった。

その創立には新島襄が係わり、共愛社の役員として働いていた。初代校長には前橋教会牧師不破唯次郎が就任、以来、堀貞一など前橋教会の牧師が無給で校長になる時代が続いた。無論、中には、教育者や牧師ではないが、校長に短期間就任した基督者もいた。一八九七年から翌年、死去するまでその座にいた倉賀野町長松本勘十郎がその人である。同家にはしばしば、新島襄も立ち寄り、高崎教会設立に際しては莫大な資財を寄付した篤

志家であった。その息子(養子)こそ、他でもない東大教授心理学者松本亦太郎である。なお、同校を組合教会の学校と見るのは誤りである。理事の深沢利重はロシア正教会員、森川抱次は救世軍、森村堯太は日本キリストであり、言わば超教派の学校としての色彩が濃厚であった。その傾向は現在にも継承されており、安中教会主導の新島学園とは異なる性格を帯びていた。ただその中でやや、組合教会系の理事・役員が多かったと言えよう。全国で公立・私立含めて十三、四校しか女学校はなく、前橋に県立の女学校が出来ても、応募者が乏しく廃校になる時代に共愛は創立され、半田多加子に代表される、上毛婦人レプタ会が献金活動を継続して、学校の財政を支えてきた。レプタ会の人々が廃娼運動にも熱心であったことは言うまでもない。周は、慎ましい経営を進めてきた、まさに独立自給の学校運営をいとなむ同校に赴任したのである。財政面での苦労は掛けぬとの約束ではあったが、大変な赤字経営であり、生徒も少なく三百名、教員にも恵まれぬ状態であった。周はだれ一人、親族のい

ないこの地の学校長を四十年勤めることになった。幸い、柏木義円を始め、群馬の牧師や教会員は周を次第に好意的に迎えてくれるようになった。高い学歴と人格を持つ周を、最初の一時はともかく、誰も差別をしえなかったであろう。彼は就任一年後から学校改革に着手した。その折に発表された一文を紹介しよう。従来、中等教育の現場とあまり係わりのなかった彼の何処に、かかる教育観が潜在していたのであろうか。体験論と見るには高すぎる見解であろう。

「——教師は出来るだけ同じ学校に長く留まるべきである。——(略)——もつともこれには、教師の自覚と断えざる修養と努力と進歩を、それに信念がなければ出来ない。自分の拙き経験を申せば、私は、小学校時代、中学校時代、大学時代に、各時代には敬慕する所の恩師を持ち、現今もなおその教師たちをば敬慕おくあたわざるは、私の一生の大なる祝福であると考えて感謝に堪えない。——(略)——しかしながら中等学校時代は、生徒の心身発達の最もいちじるしく思想感情習慣の養成に最も良い時であって、本当に人

間としての教育の最も有効に行われる時代である。——(略)——第一に教師は理想がなくてはならぬ。理想を目標にその生徒を導かねばならぬ。理想に到達しようとする努力には自然と信仰を必要とするのである。第二に教師は学識が勝れていなければならぬ。それとともに常識に富み、学理と実生活との交渉を生徒には示すことも大切である。第三に教師は公平でなければならぬ。公平は、冷静にものを判断する習慣によつて養われるのである。——(略)——しかし、理想・学識・公平の三者を兼備せば、良教師たるを失わない。かかる良教師を有する学校は、即ち良き学校で、その設備は第二であるといつて差し支えない。——(略)——学校はその教師の人格的感化を期待し、長続きすることを望み、その途を講ずべきものである。また教師はその学校の為にすべてを捧げるに至つて、初めて教育の効果があらわれるものと信ずる。」

右の文書は周再賜の教育観・教師観が良く表現されていると言えよう。以来、彼の価値観は退職するまで変化しなかつた。周は就任以来、機構改革にも着手、

同窓会を重視したり、学内にもYWCAを養足させた。それに近代的設備のある共愛館を建設、漸く学校らしい雰囲気が出て、県立女学校と対抗しうる基礎も出来た。「犠牲と献身・清潔」を主張する周の教育は県民の評価するところとなり、さらには、台湾・朝鮮の生徒も学園生活をするようになった。わずか十年で学校は見違えるようになった。周はここで、他の学校には見られない生活を始めていた。校長室は設けない、事務室の受付にすわり、尋ね人があると、私が周ですと答えるのが当然のこととされた。暇があれば、用務員さんのように、庭掃除をしたり、寮生のため風呂を炊くなどの作業をし、生徒をわが子のように大事に扱つた。しかし学則・寮則は厳守させたから、毎日、夕食後二時間の自習は徹底してやらせた。また、退職まで、情実入学を拒否、留守中に贈答品が届くと、その日以内に自転車で六里先まで返却のために走つたこともあった。これらの話は周の潔癖な教育精神として、今でも語り継がれている。しかし、間もなく始まる十五年戦争は、周にとつても、学校にとつても

大変な受難の時代となった。軍国主義の時代にあつて、周は苦闘のうちに学園の自治と信仰の自由を守り抜いた。名義上は選択科目として英語教育を継続し、修身の授業では聖書講義を周が担当した。彼はある年の一二月八日の礼拝で「剣によりて向かう者は剣にて滅ぶべし」の説教をし、戦争批判をしたために、憲兵隊の介入を受けた。

幸い生徒の親で県国防婦人会長をしてゐる女性が嚴重に憲兵隊に抗議、周は逮捕を免れた。また、憲兵隊が指示した妥協条件も彼は「共愛からキリスト教をなくすなら、私は牢獄に入る」との決意を示したため、軍も存分な介入は出来ず、終に、奉安殿を造る事も、伊勢の大麻を学校に祀る事もせず、終戦を迎えることが出来た。戦時下にこそ、彼の教育精神と信仰は見事に開花したと言えよう。しかし、一九四五年八月五日の前橋空襲で学校は全焼、終戦を迎えても授業再開の見通しが立たなかった。周は生徒に対し、仮に青空教室であつても手洗いさえ出来れば授業を再開すると語り一〇月五日に開校式を挙行、「第二の共愛」が復活した。

以来、約二十年、周は戦後の共愛に貢献したが、晩年には後継者問題で大変な苦労と迫害を受け、一九六九年、老衰の為に召された。その人生は余りにも痛ましく、余りにも清潔であり、全てを神の為に捧げた生涯であつたと言えるであらう。かつては、ガントレット恒子が教鞭をとり、久布白落實も学んだ同校から、周の時代には鶴見（横山）貞子京都精華大学教授や日本オペラ界のトップ歌手成田繪智子など、各界で活躍する卒業生を輩出した。周亡き後、同校は、苦難を乗り越えて、女子の学園として充実しており、更に伝統の重みに答えるべく、四年制女子大学の設立が計画されている。

参考文献

- 一、清水安三編著 周再賜の生涯
- 一、菅井吉郎編 共愛学園七十年史
- 一、共愛学園編 共愛学園九十年記念誌
- 一九七八年 共愛社発行

なお、周の姪に当たる有賀のゆり同志社女子大学名誉教授からも、何かと教えて戴いた。誌上を借りて感謝の気持ちを表したい。